

すくわくプログラム推進事業実践報告書

所在地	東京都新宿区西早稲田 1-1-7 早稲田 STEP23 2F
施設名	ポピンズナーサリースクール早稲田

1. 活動のテーマ

<テーマ>

身近なモノから広がる『ふしぎ』の科学探究

<テーマの設定理由>

自然豊かな公園での日常的な戸外活動という園の強みにより、生きた自然現象に対する素朴な疑問が日常的に見られていることやアート体験で多様な素材に触れる機会も多く、具体的な「なぜ？」の発言や、素材の性質を探ろうとする試行錯誤の行動が多く見受けられることから、「身近なモノ」を主役とした科学探究を進めることで、その興味関心と能動的な姿勢を広げるため。

2. 活動スケジュール

- ① 2025年8月13日 テーマ：鏡
- ② 2025年9月10日 テーマ：石鹼
- ③ 2025年10月8日 テーマ：バスボム
- ④ 2025年11月12日 テーマ：音
- ⑤ 2026年1月14日 テーマ：色
- ⑥ 2026年3月振り返り

(4日：石鹼 24日：音 27日：色 30日：鏡 31日バスボム)

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・鏡や色水、クエン酸、重曹、スポイト、カラーセロハン、紙コップ、ミラー紙など各活動に必要な素材や道具を用意。また、専門的なサポートの部分では専門講師と連携して活動。
- ・マイク・スピーカー・プロジェクターを用意し、活動や振り返りで使用をした。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

■鏡：大小の鏡と、文字や数字が左右反対に印刷された反転文字シートを用意。大きな鏡にシートを映して文字が正しく読める現象を観察したほか、2枚の鏡を組み合わせて角度による映り方の不思議に気づく活動。

■石鹼：グリセリン石鹼、色水、スポイト、型を用意。液体状に溶かした石鹼に色素を混ぜて好きな色を作り、型に流し込んでから固まるまでの状態変化を観察しながら製作。身近に当たり前にあるものがどのように出来ているかの興味関心を広げる。

■バスボム：身近なものとしてバスボム作り。重曹、クエン酸、色水、を用意。材料を混ぜ合わせて少量の水を入れることで発生する反応を観察しながら製作。

■音：子どもたちの死角で音を出し、何の音かを考える。タコ糸を擦る音や紙コップの衝突音などで動物の音を表現。お友達と同じものを使っても、使い方によって出る音が違うこの発見をする。

■色の不思議：カラーセロハンや赤と青の色鉛筆などを用意。特定の色を通すと絵が消えたり現れたりする現象を観察し、最後は赤と青で描かれた図形をカラーセロハンで覗いて立体的に見えることなど色の不思議を発見する。

■3月 保育実践活動記録

①石鹼：成分の違いと理想の泡作り 園で使用しているハンドソープの成分（無添加・一般）による洗い心地の違いを比較。また、液体石鹼をネットで泡立てて「理想的な泡」を作る実験を通し、日常的な衛生習慣への関心と理解を深めました。

②音：身体で奏でるボディパーカッション 音の発生源や日常の音について考えた後、感情を音で表現（手拍子や足踏みなど）する活動を実施。3人1組でのボディパーカッション作りでは、音の組み合わせを試行錯誤しながら、自分たちの身体から出る音の多様性を楽しみました。

③色の不思議：色と感情のつながり 絵本『カラーモンスター』を題材に、特定の色から受ける感情（赤＝怒りなど）を考察。色による見え方の違いや心理的影響を学んだ後、今の自分の気持ちをカラーペンで自由に表現し、色彩への感性を養いました。

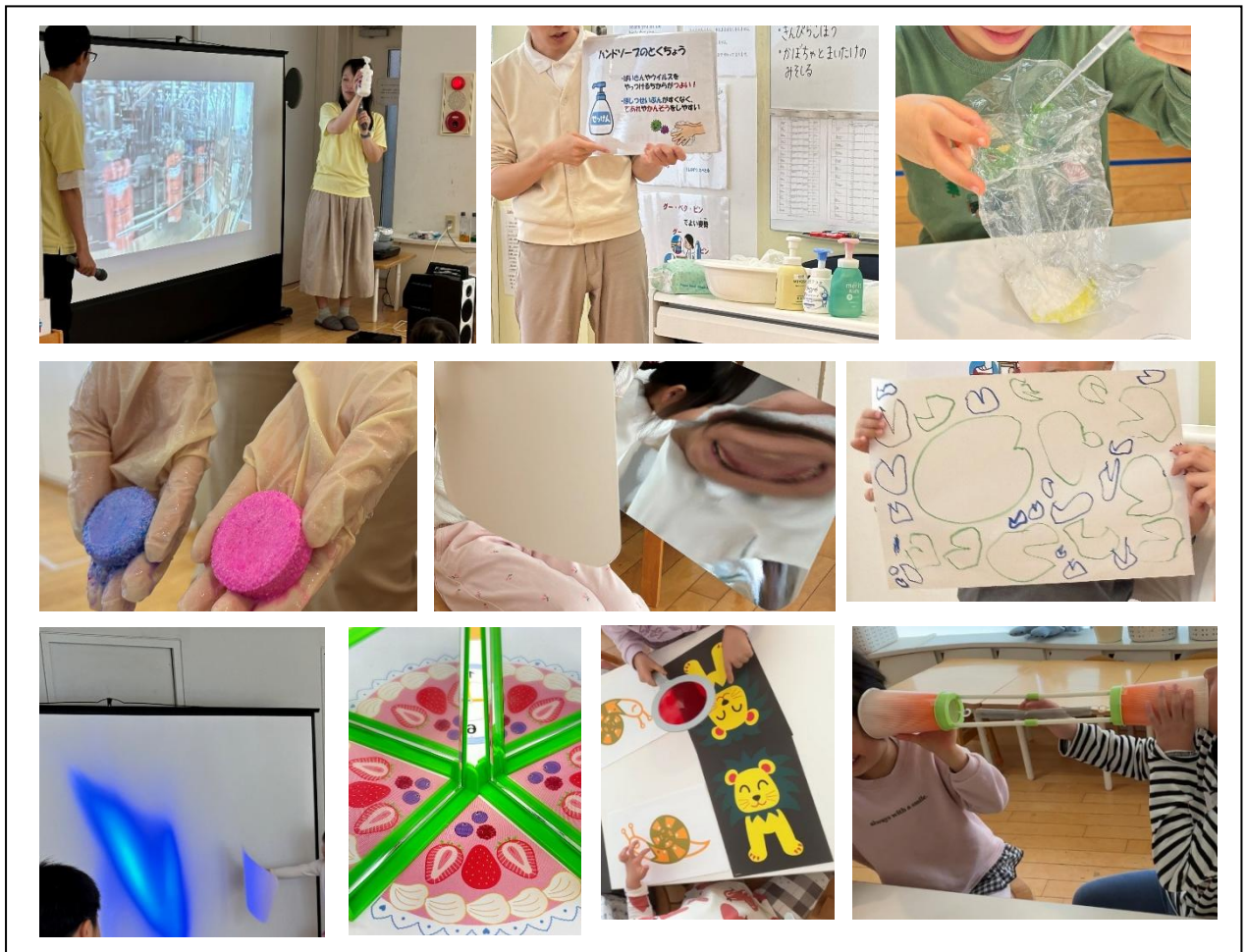
④鏡：ミラー紙と光の反射遊び 変幻自在なミラー紙を使い、物の数や形が歪む変化を自ら加減して実験。プロジェクターや太陽光を反射させる活動では、角度を試行錯誤しながら光を狙った場所へ飛ばすなど、光の性質を体感的に楽しみました。

⑤バスボム：入浴剤による化学反応と溶解実験 市販の入浴剤を用いた色の変化や、水と油に入浴剤を入れた際の反応を観察。さらに、水と湯での溶け方の違いを比較する3つの実験を通し、温度や物質の組み合わせによる変化の不思議を体験しました。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

子どもたちの身近にある物事を「科学」として探求していくことで、子どもたちは親近感を持ちながら、自発的に活動を行っていた。素材が液体から固体へ変化したり、水で泡が出たりする現象を「魔法みたい!」と驚いたり、鏡や色の不思議の実験では、角度を変えたりセロハンを重ねたりと自ら試行錯誤を繰り返し、「見て、絵が変わったよ!」と友達や保育者と発見を共有する姿が何度も見られた。

保育者は、子どもたちの素朴な疑問や予想を大切に受け止め、「お水を入れたらどうなるかな?」「鏡を合わせると何が見える?」と、探究を促す問いかけを行いました。また、手洗いの際の鏡や入浴時のバスボムなど、生活場面と結びつけたキーワードを提示することで、日常の中にある科学への気づきと「やってみたい」という能動的な姿勢を広げられるような関わりを意識した。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

(いつ、だれと、どのように活動を振り返り、何に気づいたかを記載してください。)

今回の活動を通じ、保育者が細かな指示を出さずとも、子どもたちは遊びの中で自律的に法則を見つけ出す力を持っていることを再認識しました。3月は、これまでの学びをさらに深め、生活や自己表現へと繋げる活動を、テーマによって、全クラス、2～幼児クラス、4・5歳児クラスと共に集中的に行いました。

<能動的な学びの姿>

保育者の想定を超えてミラー紙を工夫し、狙った場所に光を飛ばそうとする姿は、まさに生きた学びそのものでした。

<環境構成の課題>

創作活動において、意見を出すのが難しい子への配慮や、他者の体に触れる際のマナー（プライベートゾーンの意識）の伝え方など、一人ひとりが安心して自己表現できる場づくりの重要性が明確になりました。

<今後の展望：さらなる探究に向けて>

子どもたちの「なぜ?」「もっとやりたい!」というエネルギーは、今や日常のあらゆる場面に波及しています。

今後は、子どもたちが立てた「仮説」をさらに深掘りできるよう、「戸外での発見を科学の手法で検証し、アートで表現する」といった

園の強みをクロスオーバーさせた探究サイクルを構成し、子どもたちの無限の好奇心に伴走していきたいと思えます。